

楽しく自己表現できる教材開発と指導の工夫

－彫刻の表現と鑑賞の学習を通して－

松本和子

生徒が彫刻の学習に興味をもち、楽しく活動しながら対象を立体としてとらえる力を身に付け、自己表現の喜びや成就感を味わえるような教材や指導方法について研究を行った。楽しく取り組める題材や材料について検討するとともに、「視覚」と「触覚」を活かした指導方法の工夫や補助資料の開発等に取り組み授業実践を行った。その結果、生徒の多くが、楽しく活動しながら対象を立体としてとらえ表現することができるようになった。

〈キーワード〉彫刻、視触覚芸術、立体としてとらえる力、楽しく分かりやすい授業、視覚、触覚

I 主題設定の理由

現行の中学校学習指導要領において彫刻の学習のねらいは次のように示されている。

対象を立体としてとらえ、様々な方向から観察し、とらえたことや感じ取ったこと想像したことなどを基に、材料を選び、つくり方を工夫して立体として表わす喜びを味わうことであり、その活動を通しながら基礎的技能を確実に身に付け、表現に生かすことで自己表現の成就感を味わっていくことができるようにする。

ここでの最終的なねらいは「自己表現の成就感を味わうことができるようにする」ことであるが、そのためには多くの資質・能力の育成が求められている（図1）。そしてそれらの根底にあるのが「立体としてとらえる力」であり、まず対象を立体としてとらえることができなければ、ねらいに迫ることができないといえる。

彫刻の指導においては、生徒が立体としてとらえることができるようにするために、対象をいろいろな方向から観察させてその形の違いに気付かせることが基礎となる。ほとんどの中学生は、観る方向によって見える形が違うことを理解し、それをスケッチする（平面に表す）ことはできると思われる。しかし、それを実際に立体的に表すことは容易ではない。視覚的には理解できていても立体的につくれないということは、結局立体としてとらえる力が十分に身に付いていないということである。そこで、楽しみながら授業に取り組み、対象を立体としてとらえて表現・鑑賞できる力を身に付けることで自己表現の喜びや成就感を味わうことができるような教材や指導方法・補助資料の開発を目指して、本主題を設定した。

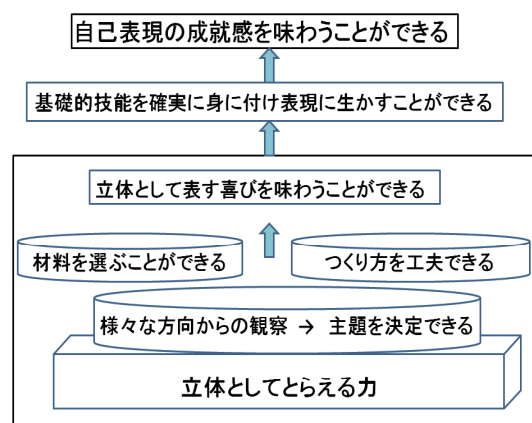


図1 彫刻の学習のねらい

楽しみながら授業に取り組み、対象を立体としてとらえて表現・鑑賞できる力を身に付けることで自己表現の喜びや成就感を味わうことができるような教材や指導方法・補助資料の開発を目指して、本主題を設定した。

II 研究の目標

生徒が彫刻の学習に興味をもち、楽しく活動しながら対象を立体としてとらえる力を身に付け、自己表現の喜びや成就感を味わうことができるように、学習内容や材料、指導方法の工夫、効果的な補助資料の開発について「視触覚芸術」という点に着眼して研究に取り組み、授業実践を通してその有効性を明らかにする。

Ⅲ 研究の方法

1 意識調査と実態把握

彫刻の学習に対する生徒と教師の意識を調査し、その実態を把握する。

2 楽しく活動しながら自己表現の喜びや成就感を味わうことができる授業づくり

彫刻の学習への興味・関心を高めるとともに、生徒が楽しく活動しながら対象を立体としてとらえて表現・鑑賞できる力を身に付け、自己表現の喜びや成就感を味わうことができるような題材や材料、指導方法、補助資料を、「視触覚芸術」という視点から開発する。

3 授業実践と考察

楽しく活動しながら対象を立体としてとらえる力を身に付け、自己表現の喜びや成就感を味わえるような題材や材料、指導方法、補助資料であったかを、授業実践を行い、生徒の作品や意識の変化から考察する。

Ⅳ 研究の内容

1 意識調査と実態把握

生徒が彫刻の学習に対してどのような思いをもっているのか、その実態を把握するために、研究協力校の生徒350人にアンケートを行った。また、美術教師12人にもアンケートを行い、指導する側の意識と実態も把握することにした。

(1) 生徒の意識調査から

制作・鑑賞のそれぞれの分野において、絵画と彫刻を比較して好みを調査したところ、図2・3のように、両方とも絵画を好む生徒のポイントが彫刻を上回った。それぞれを選んだ理由について自由

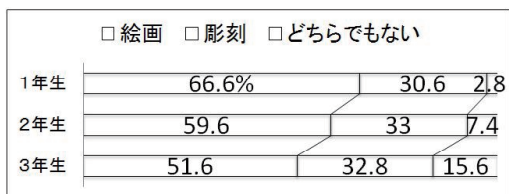


図2 制作についてどちらが好きか

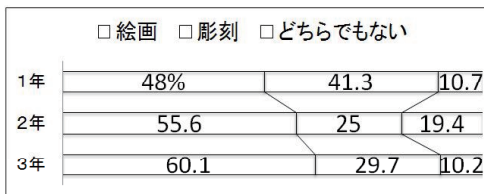


図3 鑑賞についてどちらが好きか

記述からまとめたものが表1である。絵画を選んだ理由で一番多かったのが「ア. 彫刻は難しく思うように

つくれない」であった。ここで、注目したいのは、「イ. 絵画の方が好き」という理由より「ア.」の方が人数が多いことや、彫刻を選んだ理由で「a. 彫刻は面白い」と記述した生徒が少なくないことである。これらから考えると、生徒は彫刻の学習に興味がないわけではなく、その面白さも感じてはいるが、制作が難しく思うようにつくることができないために、絵画の方を好む傾向があるということがいえるであろう。また、「サ. 彫刻は経験がなく分からない」「シ. 絵の経験の方が多い」という理由があ

表1 自由記述より ()内は人数

絵画を選んだ理由	彫刻を選んだ理由
ア. 彫刻は難しく思うようにつくれない (50)	a. 彫刻は面白い (42)
イ. 絵の方が好き (37)	b. 彫刻は立体的に表せるのがいい (19)
ウ. 絵の方が表しやすい (25)	c. 絵が嫌い・苦手 (17)
エ. 絵は楽しい (20)	d. 彫刻の方が好き (11)
オ. 絵は色があっている (16)	e. 彫刻はいろんな表現ができる (6)
カ. 彫刻は嫌い・苦手 (12)	f. 彫刻は完成したときの喜びが大きい (4)
キ. 彫刻は失敗すると大変・怪もする (11)	g. 彫刻は手を使ってつくっているという感じがいい (4)
ク. 彫刻は時間がかかる・面倒くさい (8)	h. 色ぬりが嫌い (2)
ケ. 絵はいろんな表現ができる (6)	

難しく思うようにつくれない」という理由より「ア.」の方が人数が多いことや、彫刻を選んだ理由で「a. 彫刻は面白い」と記述した生徒が少なくないことである。これらから考えると、生徒は彫刻の学習に興味がないわけではなく、その面白さも感じてはいるが、制作が難しく思うようにつくることができないために、絵画の方を好む傾向があるということがいえるであろう。また、「サ. 彫刻は経験がなく分からない」「シ. 絵の経験の方が多い」という理由があ

ることも注目すべき点で、生徒が彫刻の学習を経験する機会が少ないという実態がうかがえる。事実、教科書の「絵や彫刻に表す」分野で提示されている参考作品の数を見ると、彫刻の数は絵画を大きく下回っている(図4)。そのため生徒の彫刻についての知識も少な

- コ. 絵はいろんなことが想像できる (6)
- サ. 彫刻は経験がなく分からない (6)
- シ. 絵の経験の方が多い (4)

く(図5)、これらのことも図2の結果に影響を与えているといえるであろう。また、美術館での彫刻作品の展示が少ないことや図書館や書店においても彫刻に関する書物が少ないこと等、社会一般

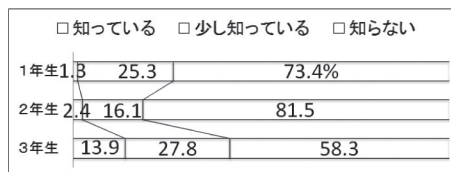
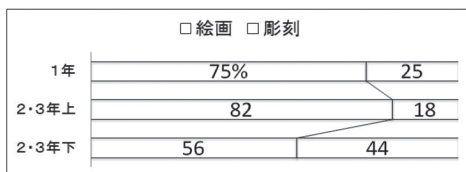


図4 教科書に載っている参考作品数 図5 彫刻の作品や作家を知っているか

報が絵画に比べて少ないという実態も生徒の意識に影響を与えているのではないかと考える。

(2) 教師の意識調査から

学習指導要領で求められている彫刻のねらいを達成するには、生徒に多くの学習を体験させることが必要である。また、「空間の美を感じ取ることができるのは思春期頃からだ」といわれており、発達段階を考えても中学生のこの時期に彫刻の学習を扱うことは効果的であり、その活動には十分な時間を当てるべきだと考える。しかし、授業時間数の削減や、学習指導要領に「絵や彫刻で表す」と括られ選択可能であること、彫刻特有の様々な問題点があること等から、彫刻の学習に十分な時間を確保できていないことが危惧される。そこで、実態把握のため教師に意識調査を行った(図6～8)。

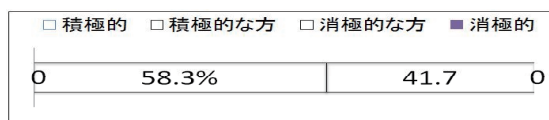


図6 彫刻の授業に積極的か

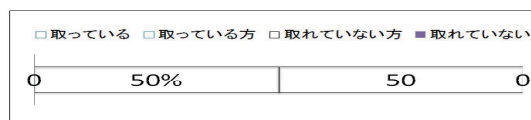


図7 彫刻の授業に十分時間を取っているか

図6・7を見ると、約半数が彫刻の学習に消極的な方で、時間も十分には取れていないことが分かる。理由は表2に示したが、やはり時間の問題と彫刻特有の諸問題点が原因だといえよう。

表2 理由

- ・時間が確保できないから
- ・準備・後始末が大変だから
- ・作品の保管場所がないから
- ・進度の差が大きいためから
- ・材料費がかかるから
- ・ゴミが出るから
- ・道具が必要だから
- ・作品の完成度が低いから
- ・指導力がないから

さらに、半数以上の教師が彫刻の指導を難しいと感じていることも(図8)、彫刻の授業が積極的に行われたい要因だと考えられる。このように、指導する側の意識によって、生徒が彫刻の学習を多く体験できるかどうか左右されることも否めないわけである。

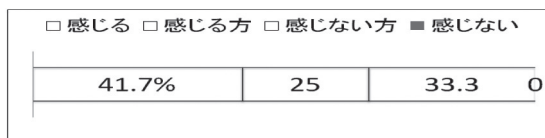


図8 彫刻の指導を難しいと感じるか

2 楽しく活動しながら自己表現の喜びや成就感を味わうことができる授業づくり

1で把握した生徒や教師の実態を踏まえて、生徒も教師も楽しみながら取り組み、誰にでも自己表現の喜びや成就感を味わわせることができるような授業づくりを工夫することにした。

(1) 彫刻の学習への興味・関心を高めるための手立てについて

彫刻の魅力やその学習の意義について考察し、その面白さや必要性を生徒に分かりやすく語り聞かせることで、興味・関心を高める手立ての一助にしたいと考えた。

① 彫刻の魅力についての考察

彫刻は私たち人間と同じ空間を共有しながらそこに三次元の立体として確かに存在し、観る者に何かを語りかけている芸術である。私たちは、観る角度による形の変化や、光と影の織りなす多様な表情の美しさを「目(視覚)」で確かめるとともに、その存在感やボリューム、ムーブメント、凹凸等を「手(触覚)」でも感じ取りながら鑑賞を楽しむことができる。その制作においても、「目(視覚)」と「手(触覚)」を働かせて表現するわけであるが、世界共通して幼い子どもたちが泥遊びや砂遊び

に夢中になることを考えると、手を直に使い触覚を働かせてつくることは、人間の本能をくすぐる魅力的な活動であるといえるのではないだろうか。また、立体である対象から感じ取ったことをそのまま立体で表現するというは実に自然な行為であり、三次元の世界を二次元に表わす絵画の制作より、ある意味、取り組みやすいとも考えられる。

② 彫刻の学習の意義についての考察

私たち人間は立体空間の中で様々な物事に囲まれて生きている。したがって、常に自分と物との空間関係を正確に認識し適応する必要がある。つまり物を立体としてとらえる力や、奥行きや広がりを感じ取る力、空間と物と自分の関係をとらえる力がないと、安全に日常生活を営むことができないということである。彫刻の表現や鑑賞をするには、上記のような力が必要不可欠である。そして彫刻の学習の積み重ねによってこれらの力を身に付け高めることができると考える。また私たちは、主に「視覚」と「触覚」を使って物を認識する。先にも記述したように彫刻はこの「視覚」と「触覚」を働かせて制作するもので、「視触覚芸術」とも呼ばれる。つまり「視覚」と「触覚」を働かせて彫刻を制作したり鑑賞したりすることは、認識力の向上にもつながると考える。

(2) 題材と材料の工夫

① 題材について

彫刻のモチーフは多様であり、中学生では野菜や果物、自分の手、運動する人、友達の頭像、動物等がよく扱われる。本研究では、「人の顔」をつくることを題材に選んだ。私たちは個別の顔をもっており、全く同じ顔の人はいないであろう。つまり、顔は視覚的個性そのものであるといえる。それぞれの人の体験や生き様が顔に刻み込まれ、その人独自の顔がつくられていくのであり、顔はまさにその人の人生そのもののだともいえよう。さらに顔は、その人の感情や内面までも表し、その形状の多様さに加え人間そのものの存在を考える上でも、大変興味深く魅力あるモチーフだと考える。

対象を立体としてとらえて表現できるようにするためには、作品をある程度の大きさでつくる必要がある。小さければ小さいほどその制作は困難になるからである。そこでここでは「顔」だけに焦点を絞り、マスクの形態で制作することにした。

② 材料について

中学校の美術で広く使われている粘土は加工粘土と呼ばれ、乾燥後そのまま作品として保存できるものである。しかし、これらは人工的な素材が含まれているせいか、手触りが悪く扱いづらいものが多い。そこで加工粘土の中でも比較的触感が良く扱いやすい「白木節」という粘土を使うことにした。これは研究協力校で毎年使っているものなので、生徒も馴染みやすく抵抗が少ないだろうと考えたからでもある。同時に、自然素材である水粘土の触感の良さや扱いやすさも体験させたかったので、最後の作品は水粘土を使って制作し、焼成することにした。

(3) 指導方法の工夫

① 制作手順の作成

生徒や教師の意識や実態を踏まえると、かなり詳しい制作手順を提示し丁寧な指導をする必要があると感じ、下記のような制作手順Ⅰを作成した(表3)。

表3 制作手順Ⅰ

制作手順Ⅰ	指導のポイント
1)新聞紙で土台をつくる。	平らにならないよう新聞紙で土台を盛り上げる。
2)粘土をのぼし、土台にかぶせる。	
3)鼻は粘土を引っ張り出し、鼻の穴もつくる。	パーツを置くつくり方にならないようにする。
4)目は切り込みを入れて広げ、中に目玉を入れて 顔をかぶせる。	目も口も皮膚が裂けてできていることを意識させる。
5)口も切り込みを入れて、唇をつくる。	

6) 眉毛は短い毛が生えているようにつくる。	概念でつくらないようにする。
7) 髪の毛は頭皮から生えているようにつくる。	

この制作手順に従って取り組んだ授業が授業3 (p.103)である。その結果を踏まえて、改善を加え制作手順Ⅱ (表4) を作成し、授業5 (p.107)に臨んだ。

表4 制作手順Ⅱ (アンダーラインの部分が改善点)

制作手順Ⅱ	改善のポイント
1) 新聞紙を濡らし固く絞ったもので土台をつくる。	粘土の水分が新聞紙に吸収され乾燥が早まるのを防ぎ、丈夫な土台にするため新聞紙を濡らす。
2) 厚みを均一にした (のばし棒とたたらを使用) 板状の粘土をかぶせる。	乾燥・焼成時の割れを防ぐため粘土の厚みを均一にする。
3) あごを引っ張り出してつくる。	あごが低くなったりつくりづらかったりするため鼻より先にあごをつくる。
4) 顔の輪郭や頬の出っ張りをつくる。	顔の凸凹をとらえさせる。
5) 鼻は粘土を引っ張り出し、鼻の穴もつくる。	
6) 口はヘラでしっかり切り込みを入れて、 <u>そのまま中央部分を持ち上げて</u> から唇をつくる。	口の中央部が高いことや、唇は身体の中からつながっていることを意識させる。
7) 目も口と同様にし、目玉を入れて瞼をかぶせる。	目も中央部が高いことや目玉と瞼の位置関係を意識させる。
8) 眉毛は短い毛が生えているようにつくる。	
9) <u>耳</u> をつくる。	より人間らしくつくる。
10) 髪の毛は頭皮から生えているようにつくる。	

② 「視覚」「触覚」を活かした指導の工夫と補助資料の開発

視触覚芸術である彫刻の指導に当たっては、その特徴である「視覚」と「触覚」を活かすことが効果的であると考え、下記のように指導方法の工夫と補助資料の開発に取り組んだ (表5・表6)。

表5 「視覚」を活かした指導方法と補助資料

<ul style="list-style-type: none"> ・頭がい骨モデル (図9) を提示する。 ・ワークシート (図10) を作成し、利用する。 ・針金スケール (柔らかい針金を顔に沿わせてその凹凸を把握する道具)を開発し、活用する。 ・合わせ鏡を利用し、自分の顔を観察させる。 ・制作手順のポイントを写真や文章で黒板に示す。 ・授業者がつくって見せる。 ・研究員が制作した頭像や参考作品を提示する。

表6 「触覚」を活かした指導方法と補助資料

<ul style="list-style-type: none"> ・頭がい骨モデルに触らせる。 ・自分の顔に触らせる。 ・参考作品に触らせる。
--



図9



図10

(4) 鑑賞学習について

中学校卒業後、ほとんどの生徒は美術の授業と縁がなくなるのが現状だといえよう。大人になっても制作活動が続いている人は社会全体からすればごくわずかであろう。しかし鑑賞活動に関しては、たとえば有名な作品展が催された時の美術館の混雑を見ても分かるように、興味・関心をもって積極的に楽しもうとする人は大変多い。このような現実をみると、鑑賞の学習は生涯学習に通じる貴重な体験だといえ、中学生でも興味・関心をもって楽しく鑑賞ができるように、その力を身に付けることの必要性を強く感じる。そこで、彫刻を楽しく鑑賞するための手立てとして下記の三つの資料を作成

した。

① 彫刻の鑑賞ポイント

彫刻を鑑賞する際のポイントをまとめた（図11）。

② 街の中の彫刻マップ

研究協力校の校区には、幸いに野外彫刻がたくさん設置されている。そこで、自分が住んでいる街の何処にどんな彫刻があるのかが分かるような地図を作成し、生徒が自分の興味のある彫刻を鑑賞しに行けるようにした（図12）。

③ 彫刻鑑賞ワークシート

野外彫刻の鑑賞ポイント（図13）を記載したワークシートを作成し、夏季休業中の鑑賞課題で使用できるようにした（図14）。

〈彫刻の鑑賞ポイント〉

- ・見る方向と形
- ・触覚を使う(野外彫刻のみ)
- ・空間も含めてみる
- ・見る日時、天気の違い

図11彫刻の鑑賞のポイント



図12 街の中の彫刻マップ

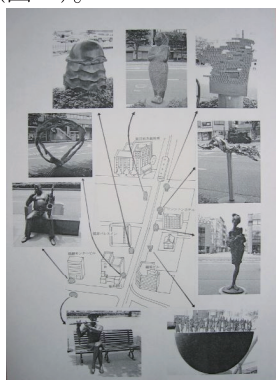


図13 野外彫刻の鑑賞のポイント

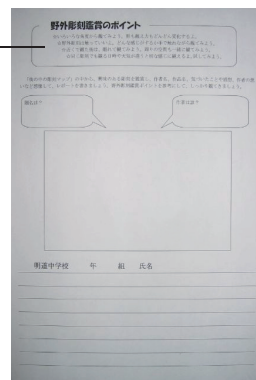


図14 ワークシート

3 授業実践と考察

(1) 平成19年度 授業実践 〈対象〉福井市明道中学校 第2学年選択美術生徒25名
〈授業者〉服部裕之 教諭

① 実践と考察

ア 授業1

〈題材名〉「粘土による人物クロッキー」

〈題材の目標〉

- i 粘土で立体として表現することに興味をもつことができる。
- ii いろいろな方向からモデルを観察し人間の全身を大まかにとらえ表現することができる。

〈題材について〉

粘土に慣れ、観察をもとに立体的に表現することを体験させるために、粘土で人物の全身をクロッキー（短時間での制作）することにした。

〈指導のポイント〉

- i 制作1では、立体的に表現するにはいろいろな方向からの観察が必要だということだけ指導し、具体的なつくり方は提示しなかった。
- ii 制作2・3では、一つの粘土のかたまりから頭や腕脚を引っ張り出してつくるように指示をした。

〈実践の結果〉

この授業では、いろいろな方向から観るために立ち歩いてかまわないと指示を出したが、誰も自分の席から動こうとしなかった。そして制作1ではほとんどの生徒が、胴・頭・腕・脚等の部分をつくり、それらをつなげる方法で制作し、つなぎ目だらけのロボットみたいな作品ができた。制作2・3と進むにつれ、少しずつ人間らしくつくれるようになったが、観察ではなく概念での制作に

なってしまったといえる。これは、観察の重要性についての指導不足や学習の環境づくりができていなかったことに原因があると考ええる。

イ 授業2

〈題材名〉「自分の顔をつくる」

〈題材の目標〉

- i 粘土で自分の顔をつくることに興味をもち、意欲的に制作に取り組むことができる。
- ii つくり方を工夫し、人の顔らしく表現することができる。

〈題材について〉

自分の顔はふだんからよく見ているだろうし自由に触ることができるので、「視覚」と「触覚」を働かせて立体として表現できるのではないかと考えこの題材を選んだ。ここでは生徒の立体表現力の実態を把握しなかったため、詳しいつくり方は提示せず自由に制作に組みこませることにした。

〈指導のポイント〉

- i 自分の顔に触ってその凹凸を感じ取らせた。
- ii 自分の顔を思い出しながらつくるように指示を出した。

できあがった作品は次のようなものであった。



〈実践の結果〉

生徒はつくり方が分からず、なかなか制作が進まなかった。そしてほとんどの者は平らな顔の形の上に目・鼻・口等のパーツをのせたり、へらで描き込んだりするつくり方を始めた。また全くつくれなかったり、とても人間とは思えない作品をつくったりする生徒も見られた。具体的なつくり方の指導をしないで立体的に表現させることは無理だということが分かり、かなり丁寧な指導が必要だと感じた。また、「視覚」を働かせるためには鏡で観察させることが必要だったと思われる。さらに、自分の顔に触った生徒が一人もいなかった点で、触覚を活かした指導ができなかったことも課題である。

ウ 授業3

〈題材名〉「友達の顔をつくる」

〈題材の目標〉

- i 友達の顔をつくることに興味をもち、その形を粘り強く追求することができる。
- ii 友達の顔を立体的に人間らしくつくることができる。

〈題材について〉

いろいろな方向から観察することで顔の形をとらえられるように、題材を「友達の顔をつくる」にした。友達の顔や補助資料を「観ること」（視覚を活かす）と自分の顔や補助資料に「触ること」（触覚を活かす）ことで、立体的表現ができることを目指した。

〈指導のポイント〉

- i 頭がい骨モデルを見せ、生徒の興味を高めるとともに、人の顔の骨格のつくりをとらえさせた。
- ii ワークシートに顔の輪郭や目・鼻口等を描き込み



図 15



図 16

ながらそれらの形や位置、つくりについて説明をし、生徒には説明箇所に合わせて自分の顔を触ってその凸凹を感じとるように指示した(図15)。

iii 針金スケールを使って顔の凹凸をとらえさせた(図16)。

iv 制作手順Iを細かく説明し、そのポイントを黒板に提示した(図17)。

v 石膏头像(自作)の顔写真を利用し、目・鼻・口などの形や位置等を確認させた(図18)。

vi 針金スケールを見やすく改善した資料(図19・20)を提示した。

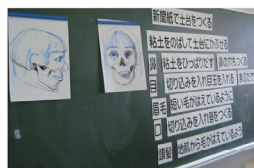


図 17

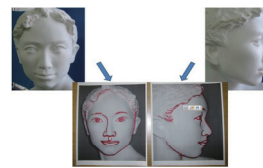


図 18



図 19



図 20

以下に、授業2と比較した作品をいくつか提示する。(左が授業2、右が授業3)



〈実践の結果〉

生徒は指示をしっかり聞いたり補助資料をよく見たりしており、つくり方を理解してうまく制作しようという意欲がうかがえた。友達顔をよく観察するためお互いに向き合ったり、相手に横を向いてもらったりしている姿が見られ、視覚を働かせて制作することはほぼできていたように思われる。しかしここでも、頭がい骨モデルや自分の顔に触る生徒がいなかったため、触覚を働かせるための指導の工夫が必要だと感じた。また、針金スケールが見つらかったり、授業者の身体で板書が見えなかったりして、提示の仕方にも問題があると感じた。ただ、作品の変化を見ると、授業2よりはかなり立体的に制作できており、今回の指導方法や補助資料は立体としてとらえ表現できるようになるための手立てとして効果的だったといえる。

エ 鑑賞授業の実践

研究協力校では、毎年夏季休業中に「美術館へ行こう」と題して、美術作品を鑑賞してレポートを書く課題を出している。そこで、生徒が彫刻に興味をもち楽しく鑑賞できるように、彫刻の鑑賞のポイントをまとめ、夏季休業の前に口頭での指導を行った。

〈実践の結果〉

授業者に、提出されたワークシートについて例年のものと比較考察してもらったが、特に変容は見られなかった。休業前の慌ただしい時期で授業者との綿密な打合せができなかったことや、口頭だけの指導で視覚的な資料がなかったこと等、十分な準備や計画ができていなかったため、効果が得られなかったと考える。彫刻の鑑賞に興味をもたせるためには、初めはある程度強制的に彫刻を鑑賞する機会をもたせる必要があると感じた。

② 成果と課題

19年度の実践では、各授業後にアンケートを行い生徒の意識の変化を比較してみることで研究の成果と課題を考察した。

〈成果〉

a 「彫刻の学習が好きか」(図21-1)

授業2の段階で「好き・好きな方」のポイントが2倍近くまでアップし、さらに授業3では90%以上を占めることができたことから、彫刻嫌いを減らすことがで

	□好き・好きな方	□嫌い・嫌いな方
授業1	43%	57
授業2	85	15
授業3	92	8

図21-1彫刻の学習が好きか

きたといえる。

b 「彫刻の学習が面白いか」(図21-2)

授業2では「面白い・面白い方」というポイントが90%以上にアップしたが授業3ではややダウンした。これは、授業2では自由につくれたが授業3では「立体的に人間の顔らしくつくる」という目標があったからであろう。ただ、彫刻の面白さは味わわせることができたといえる。

	面白い・面白い方	面白くない・面白くない方
授業1	72%	28
授業2	92	8
授業3	88	12

図21-2 彫刻の学習が面白いか

c 「彫刻の学習に興味があるか」(図21-3)

授業1では「興味がある・興味がある方」というポイントが半数以下であったのが、授業2では2倍近くまでアップした。このことは、人の顔をつくるという題材が生徒の興味を高めるのに効果的であったことを示しているといえる。

	ある・ある方	ない・ない方
授業1	46%	54
授業2	87	13
授業3	88	12

図21-3 彫刻の学習に興味があるか

d 「彫刻の制作は得意か」(図21-4)、e 「彫刻の制作は簡単か」(図21-5)

これらの結果からは、彫刻に対する苦手意識を多少は軽減でき、授業3では生徒が思うようになってきたといえる。

f 「授業3について」(図21-6)

「面白かった・立体的にできた・人の顔らしくできた」のポイントがともに高い。生徒

	得意・得意な方	苦手・苦手な方
授業1	16%	84
授業2	30	70
授業3	72	28

図21-4 彫刻制作は得意か

が楽しみながら制作に取り組み、ほぼ満足のいく作品をつくれたことがうかがえ、成就感を味わわせることができたと考える。「簡単にできた」というポイントが低いのは「次はもっとうまくつくりたい」という気持ちの表れであると判断したい。

	簡単・簡単な方	難しい・難しい方
授業1	4%	96
授業2	32	68
授業3	48	52

図21-5 彫刻の制作は簡単か

g 「頭がい骨モデルを観て」(図21-7)

顔の仕組みが理解でき制作にも役立ったというポイントが高く、頭がい骨モデルを使ったことは効果的だったといえる。しかし興味をもたせる点では、思ったよりポイントが低かったのでさらなる工夫が必要だと考える。

	肯定	否定
面白かったか	84%	16
立体的にできたか	76	24
人の顔らしくできたか	80	20
簡単にできたか	32	68

図21-6 授業3について

h 「針金スケールについて」(図21-8)

この結果から、針金スケールを使ったことは、顔の高低を理解させるのに効果的だったといえる。

i 「つくり方の指導について」(図21-9)

「つくりやすい」のポイントが「分かりやすい」のポイントを若干下回っていることから、視覚的には立体的にとらえられていても、触覚を働かせて立体として表現することができない生徒がいると考えられる。つくりやすい指導方法の研究はさらに必要だが、今回の指導が分かりやすくつくりやすかったことはそれぞれのポイントの高さからうかがえる。

	肯定	否定
興味を持てたか	68%	32
顔の仕組みがわかったか	92	8
制作に役立ったか	80	20

図21-7 頭がい骨モデルを観て

	肯定	否定
顔の高低が分かった	88%	12

図21-8 針金スケールについて

	肯定	否定
分かりやすかったか	84%	16
つくりやすかったか	76	24

図21-9 つくり方の指導について

(課題)

- i) 生徒の興味・関心を高めるための手立てを考える。
- ii) 生徒に主題をもたせることで、個性的で面白い作品ができるようにする。
- iii) 分かりやすくつくりやすい指導方法を追究する。
- iv) 補助資料を充実させ活用方法を工夫する。

v) ワークシートの作成と活用の方を考ふる。

- (2) **平成20年度 実践** 〈対象〉福井市明道中学校 美術部生徒13名
 〈指導者〉服部裕之 教諭 松本和子 研究員

① 実践と考察

ア 実践4

〈題材名〉「友達の顔をつくる」

〈題材の目標〉

- i 粘土で人の顔をつくることに興味をもち、意欲的に制作に取り組むことができる。
- ii 観察をもとに、人の顔らしく表現することができる。

〈題材について〉

題材は「人の顔」に絞り、制作しやすいようにある程度大きくつくることにした。まずしっかり「視覚」を働かせて立体的に表現できるようにしたいと考え、観察しやすいように「友達の顔」をモチーフにした。ただし、生徒の表現力の実態も把握しなかったため、具体的な制作手順等は指示しないで自由に制作させた。

〈指導のポイント〉

- i 彫刻の魅力やその学習の意義について話し、興味・関心を高めた。
- ii 2・3人のグループをつくり、お互いの顔をよく観察してつくるように指導した。

以下に作品を示す。(線で囲ったのが同じグループ)



〈実践の結果〉

実践前に意識調査を行ったところ、ほぼ全員が彫刻に興味をもっているということが分かった。これは対象が美術部員だったためだと考ふる。そこでさらに興味・関心を高めるため、彫刻の魅力やその学習の意義について話をした。粘土を使って立体作品をつくるのは初めてという生徒がほとんどだったためか、真剣に話を聞いていた。しかし、お互いの顔を観察し合うことは恥ずかしいようで、向き合ってたつたのは男子の2人だけだった(グループa)。ただ他の生徒も、友達の顔をちらちら見たり、自分の方に顔を向かせたりしながらつっており、観察の必要性は感じていたようだ。興味深かったのは、鏡を持ち出し、隣の友達の顔が鏡に映るようにしてそれを観ながらつってついていたグループがあつたことだ。この二人はお互いをよく観察し合つて制作に取り組んでいた(グループc)。この題材への生徒の興味・関心はとても高く、楽しみながら意欲的に取り組んでいた。できあがつた作品はやはり平面的なものが多いが、授業2ように目・鼻・口等のパーツを顔の形をした平らな土台にのせるというつくり方をする生徒は少なかった。中には、立体的になるようにつくり方を工夫したり、表情をつけたりする生徒が見られ、19年度よりはレベルが高い作品が

できた。また今回の作品を見て新たに気付いたことは、グループを組んで制作するとお互いに影響し合い、作品や制作方法がとても似るということだ。

イ 実践5

〈題材名〉「自分の顔をつくろう」

〈題材の目標〉

- i 自分の顔をつくることに興味をもち、その形を追究し、粘り強く制作に取り組むことができる。
- ii 主題をもち、自分の顔を立体的に表現できるように工夫し、自己表現の成就感を味わうことができる。

〈題材について〉

この題材では、自分の顔をしっかり観察したり触ったりすることでより立体的に表現できるようにしたいと考え、「視覚」「触覚」を活かした指導を徹底することにした。また、個性豊かな作品ができるように、主題を設定しそれに迫るような工夫をさせた。さらに、土の温かさやおもしろさを感じ取れる作品を目指し、越前の荒土を使ってテラコッタ（素焼き）の作品にすることにした。

〈指導のポイント〉

- i 頭がい骨モデルを触らせながら見せ、興味を高めるとともに顔の骨格のつくりをとらえさせた。
- ii ワークシートに目・鼻・口等を描き込みながらその形や位置を説明し、生徒にもワークシートに描き込ませた（図22・図23）。
- iii 針金スケールの補助資料を使って顔の凹凸について説明をし、生徒には自分の顔に触りながら各部分の凸凹を確認するように指導した（図24・図25）。
- iv 合わせ鏡を利用して、自分の顔をいろいろな角度から観察させその形をとらえさせた（図26）。
- v 写真を見せながら制作手順Ⅱを説明し、そのポイントも黒板に示した（図27・28）。
- vi 参考作品を提示し、完成作品をイメージさせた（図29）。
- vii 個性豊かな作品になるように表情などを工夫するよう指示した。



図22



図23



図24



図25



図26



図27

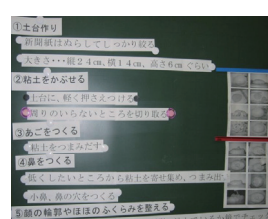


図28

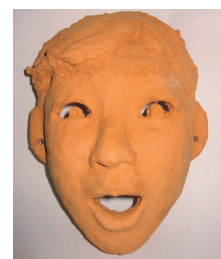


図29

以下に実践4の作品と並べて提示したい。

（左が実践4、右が実践5）





〈実践の結果〉

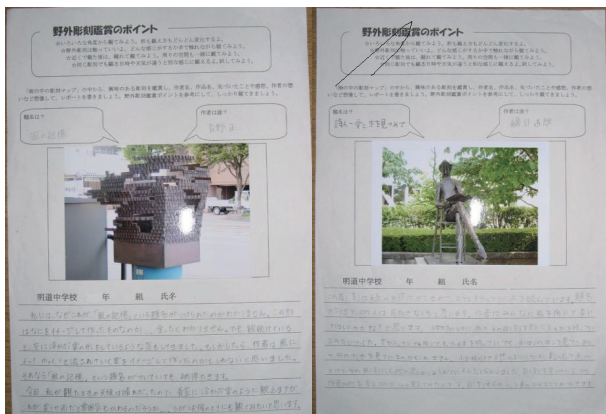
生徒は制作手順の写真や参考作品を見たり、授業者を呼んで指導を求めたりしながら、立体的に表現できるように工夫し熱心に取り組んでいた。「視覚」と「触覚」を活かした指導が十分にできるよう留意したので、19年度に比べると生徒はどちらの感覚も働かせながら制作に取り組むことができたと考える。作品を比較してみるとその変化は明らかで、立体的で人間らしくしかも表情豊かで温かみのあるものができたと思われる。授業3の作品と比較しても、今回の題材や材料、指導方法や補助資料等の効果は大きかったといえる。



ウ 鑑賞授業の実践

生徒が彫刻に興味をもち積極的に鑑賞できるよう、福井市中心部に設置されている野外彫刻の鑑賞を勧める手立てを考えた。まず、街の中の彫刻マップを使って、自分たちが住んでいる街の何処にどんな彫刻があるか知らせ興味のある彫刻を見つけさせた。そしてワークシートを利用して野外彫刻の鑑賞の仕方を指導してから彫刻の鑑賞レポート作成の課題に取り組ませた。

下に、生徒のレポートと感想から抜粋したものを示す。



見た目は木でできているようでしたが、触ってみるとかたく、鉄でできていました。（略）風が吹いている雰囲気が伝わってきました。 どのようにするのかとても不思議で…（略）。

観続けていると、空に浮かぶ雲の形をしているような気もしてきました。（略）私が観た時は晴れだったので青空に浮かぶ雲のようにみえますが、曇りや雨だと雰囲気が変わるのだろうか観てみたいです。

彫刻の鑑賞レポート

この彫刻は緑の自然に囲まれてとても涼しそうに本を読んでいます。(略)小学生の雨の時観たら誰かを待っているようでした。雪が降っていても同じです(略)。

(略)遠くから観ると本当の人かと思うほどリアルで近くから見ると細かいところまで…周囲の風景に溶け込んで…。触れてみると太陽の光で暖かくなって、人間の体温のような感じがしました。

〈実践の結果〉

アンダーラインの部分を見ると、生徒は野外彫刻の鑑賞のポイントをしっかり意識しながら、想像力を働かせて楽しく鑑賞しているといえよう。また、「いつも通っている道なのに、こんな彫刻があるのに気付かなかった」とか「彫刻も何かを言おうとしていることが分かった」「他の彫刻も観てみたい」という感想もあり、「街の中の彫刻マップ」も含めて鑑賞のワークシートを作成したことは、彫刻への興味・関心を高め楽しく鑑賞させるために効果的であったといえる。

② 成果と課題

20年度の実践では、実践前と実践後にアンケートを行い、生徒の意識の変化を見ることで成果と課題を考察した。

〈成果〉

ア アンケート結果から (対象生徒12人)

a 実践前と実践後の比較

彫刻の制作についてどう感じているか	前	後
楽しい・楽しい方	8人	12人
楽しくない・楽しくない方	0	0
興味がある・興味がある方	8	7
興味がない・興味がない方	0	0
簡単・どちらかという簡単	1	0
難しい・どちらかという難しい	5	8

実践前から彫刻を楽しんでいる生徒は多かったが、実践後には全員が楽しいと感じるようになったことから、今回の取組みが彫刻の魅力を感じさせるのに効果的だったといえよう。「難しい」というポイントがアップしたことは、今回初めて人の顔をつくった生徒がほとんどで、実際制作してみてその難しさを認識したということであろう。

b 実践4と実践5の比較

	実践4	実践5	両方○	両方×
どちらが楽しかったか	1人	6人	5人	0人
どちらが難しかったか	2	7	3	0
どちらがうまくできたか	1	10	0	1
どちらの粘土がよかったか	2	6	3	1

実践4も実践5も「楽しい」という生徒が半数以上いることから、人の顔をつくるという題材が生徒にとって魅力的だったということがうかがえる。また実践5の方が難しいという生徒が多いのは、目指す目標

が高く、求められる資質や能力が多かったからだと考える。しかし、満足感が得られているのも実践5の方であることから、難しいことをやり遂げたことで自己表現の成就感を味わえたのだと考える。

c 指導方法や補助資料が役に立ったか

	肯定的	否定的		肯定的	否定的
頭がい骨モデル	12人	0人	自分の顔を触ったこと	10人	2人
ワークシート	12	0	合わせ鏡	12	0
針金スケール	11	1	制作ポイントの提示	11	1

生徒は今回の指導方法や補助資料がどれも制作の役に立ったと感じていることから、立体として表現できるようにするため

に「視覚」や「触覚」を活かした指導方法と補助資料の活用は、分かりやすく効果的であったといえよう。

イ 生徒の感想から

生徒の感想

・ 自分の顔をつくるのは初めてだったので大変だったけれど、とて

生徒は、少しずつでもできるようになる

も楽しかった。他にもいろいろつくりたい。

- ・ 簡単だと思っていたけど意外に難しかった。でも楽しかった。
- ・ 初めは難しそうだったけど、つくってみてすごく楽しかった。
- ・ 目、鼻、口をつくるのが難しかった。また、やってみたい。
- ・ 初めはなかなかうまく特徴をとらえられなかったけど、どんどんやっていくうちに、特徴や形が分かってきてちょっと嬉しい気持ちが出てきた。とても楽しくできた。
- ・ 初めは難しかったけど、顔のつくりをつかむと、だんだん人の顔の形っぽくなったので、なかなか面白かった。

ことで、楽しさが増し意欲が高まっていくことが、これらの感想から分かる。今回の制作は難しかったが、それだけに完成できた時の喜びや達成感が大きかったのだといえよう。そして、その喜びや達成感を味わえたことが次への意欲につながっていくことがうかがえる。これらのことから、この実践は彫刻の学習のねらいを達成するために有効であったと考える。

〈課題〉

- i) 生徒に個性的で面白い主題をもたせるための手立てを考える。
- ii) 視覚でとらえたことを触覚を働かせて表現できるようにするための、効果的な指導方法や補助資料を研究する。
- iii) ICTを活用した指導方法を工夫する。
- iv) 鑑賞の学習の充実を図る。
- v) 必修の授業でも取り組めるような内容や手立てを検討する。
- vi) 新学習指導要領における彫刻のねらいに対応した内容を研究する。



V 研究のまとめ

今回の研究を通して、彫刻の学習において、その特徴である「視覚」と「触覚」を活かした指導方法や補助資料を活用することは、生徒が対象を立体としてとらえ表現・鑑賞できる力を身に付けるために、有効であることが分かった。そしてこの力を身に付け高めることで、自分の思い通りの表現や楽しい鑑賞ができるようになり、自己表現の喜びや達成感を味わえるようになることが明らかになった。この喜びや達成感が新たな意欲を喚起し、次の活動への活力を沸き立たせるのであり、それは彫刻の学習に限らず、美術の授業全般においていえることである。自己表現の喜びや達成感を味わうことができるにすることは、美術を愛好する心を育成するための要であり、私たち美術教師に求められている大きな課題であろう。そのためには、生徒が「できる」ようにすることが重要であると考え。「どうしてできないのだろう？」ではなく「どうしたらできるのだろうか？」という気持ちで、日々自分の授業を振り返り、研鑽を積むことが、生徒も教師も楽しめる授業づくりにつながることを痛感した。

最後に、研究協力員として本研究の授業実践に多大な御尽力をいただきました、福井市明道中学校の服部裕之先生をはじめ、研究に御協力いただきました福井市中学校美術科部会の先生方に、厚く御礼申し上げます。

《引用文献》

○文部省(1999) 『中学校学習指導要領(平成10年12月)解説—美術編—』 pp. 28-29

《参考文献》

- 伊藤 鈞(1982)『実践造形教育大系15 彫刻表現』海隆堂出版
- 木下繁・淀井敏夫・新井秀一郎・園田幸泰・水野谷憲郎(1976)『造形教育大系—彫塑2』海隆堂出版
- 岩野勇三(1994)『彫塑 制作の技法の実際』日貿出版社
- 古田亮・毛利伊知郎・三上満良・松本透・大谷省吾・沓沢耕介(2007)『日本彫刻の近代』淡交社
- 美術出版社(2006)『美術手帖』
- フリー百科事典 Wikipedia ホームページ(<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BD%AB%E5%88%BB>)